

大日本國大皇帝、敬テ大清國大皇帝ニ白ス、曩ニ兩國俱ニ泰西ノ諸國ト交通往來ス、而シテ、獨リ兩國未ク親善ヲ修メス、故ニ、去歲、親臣大藏卿伊達宗城ヲ簡派シテ、貴國ト條約ヲ議定シ、已ニ批准ヲ予フ、允トニ宜ク、使ヲ派シテ互換スヘシ、適々聞ク、大皇帝既ニ婚ヲ成シ、且、政ヲ親ヲスト、朕深ク之ヲ歡喜ス、乃チ、特ニ、外務大臣副島種臣ヲ貴國ニ遣シ、和約ヲ交換シ、併セテ慶賀ヲ仲ヘシム。朕固ヨリ、種臣ノ喉舌ト爲スニ堪ヘタルヲ知テ、專ク、各國事務ヲ總理セシメタレバ、朕ニ代テ擔當シ、言ニ好ニ歸ヒサルハナシ、冀クハ、大皇帝交誼ヲ思ヒ、鄰好ヲ篤クシ、茲ノ使臣ヲ待スルニ、優ニ仁厚ヲ加ヘ、是レヨリ、兩國慶ヲ蒙リ永久渝ラサランコトヲ、特ニ茲ニ敬テ白シ、併セテ大皇帝ノ多福眉壽ヲ祈ル、

御諱

大日本國璽

奉勅

副島 押

上副島ニ諭シテ曰、

爾種臣、外務ヲ總理スルノ全權ヲ以テ、清國ニ適キ、條約ヲ交換セヨ、前ニ、使臣柳原前光ヲ遣シ、議准セシ事宜ハ、一々照シ辨シテ可也、今聞ク、清帝、婚儀已ニ諧ヒ、且、政ヲ親フセントスト、朕當ニ、書ヲ送り賀ヲ伸フ、爾種臣、其レ之ヲ致セ、欽メ哉。

天皇御璽

即日、照會文ヲ、發シテ、此旨ヲ李鴻章ニ報ス。

海陸軍士、之ヲ知り、踴躍シテ來リ、副島ニ隨テ、清ニ入ランコトヲ請フ、副島許スニ、請テ、軍艦ヲ發スルヲ以テセリ。蓋シ、其氣ヲ發フナリ、士奮臂シテ去ル。副島、既ニ、大使ヲ奉ス、即チ、大丞柳原前光、出仕林有造等ヲ前驅トシテ、米郵船ニ附シ、上海ニ至ラシム。

六年二月、太政官海軍省ニ令シテ曰、

外務卿副島種臣爲特命全權大使清國へ被差遣候ニ付軍艦二艘可差出候事

即日、龍驤筑波兩艦ヲ點發シテ、海軍少將伊東祐磨ヲ提督ト爲シ、海軍中佐福島教典、伊藤倚吉等之カ甲長タリ。

三月九日、大使參朝シテ、訓ヲ請ヒ、行ヲ告ク。

上諭ニ曰

朕聞ク、臺灣島ノ生蕃、數次、我人民ヲ屠殺スト、若シ、棄テ間ハスンハ、後患何ソ極ラン、今、爾種臣ニ委スルニ、全權ヲ以テス、爾種臣、其レ往テ之ヲ伸理シ、以テ、朕カ民ヲ保ンスルノ意ニ副ヘヨ、欽メ哉。

是日、大使、顧問李仙得、隨員少丞平井希昌、鄭永寧ヲ率テ、親ク 天橋ヲ伺ヒ、神廟ヲ拜シ、式部寮ニ於テ、酒饌ヲ賜リ、又一行ノ勅奏任官へ、御照影、及び、幣帛卷錦ヲ頒賜スル、各差アリ。

十二日、大使、李、平井、鄭ヲ隨へ、橫濱ニ至テ、龍驤艦ニ乗り、南海ヲ望テ進發ス、

此日、霽雪如銀、祝砲、此中ニ互答シ、滿艦ノ士卒、濟々瀟々、大使、髯ヲ撫シテ大ニ樂ム。玆ニ、兩艦士官ヨリ水水夫ニ至ル、合計六百餘人也。抑モ、我國、大使ヲ派スルニ、御國軍艦ニ駕シテ出海スルハ、今ヲ以テ始トシ、御國軍艦ノ海外ニ航スルモ、亦、今ヲ以テ始トス。況ンヤ、大使、伐蕃ノ旨ヲ奉シ、將サニ、臺灣ニ事アラントスル、各國衆人ノ聞ク處ニシテ、今、兵艦ヲ發ス、内外目ヲ拭フ、是ヲ以テ、提督艦長等ノ、此役ニ於ルヤ、萬緒ノ注意、夙夜匪勉、紀律津々、合艦赴々トシテ、奮勵踴躍ノ色、面目ニ溢ル。大使之ヲ見テ、喜テ曰、六百之心、是六軍也。

十八日、龍驤艦、大隅佐田岬ノ南ニ航ス。連日猛浪、大艦士、海病ニ臥ス者多シ。提督艦長、尙ホ海兵ヲ閱シ、砲銃隊ノ運動或ハ火災消防ヲ操演シ、時ニ、樂隊ニ命シテ、鼓吹以テ其神ヲ悅ハシム、此處、臺灣海ノ黑潮流衝スルヲ以テ、稍々晏ツシ、大使、將臺上ニ立テ、詩ヲ賦シテ曰、

風聲鼓濤濤聲奔
火輪一封艦旗飄
聖言切至在臣耳
保護海南新建藩

十九日、鹿兒島縣ニ至リ、大使、上陸シテ、會所ニ寄寓シ、參議西郷隆盛來訪ス。翌日、大使、從二位島津久光ノ招ニ赴キ、風聲鼓濤ノ汗ヲ把持ス、島津大ニ喜ヒ、越時市街ニ朗吟セリ。

三十一日、上海港ニ至リ、大使、虹口ノ客店ニ館ス。兵備道沈秉成、同知府陳福勳、其他、魯親皇阿歷西斯ノ隨員、各國過路ノ公使、及ヒ、軍艦士官、領事、術師、醫者等、絡繹來テ安ヲ問フ、大使、書記官ヲ遣ハシ、答禮ス。

四月三日、魯親王、將サニ長崎ニ之ントス、此夜、上海ニ居ル處ノ外國官吏、商賈等、親王ノ行ヲ祝スル爲メ、家々、盛ニ燈火ヲ張テ、鼓吹四モニ奏シ、水龍車ヲ飾テ、五彩ノ火戲ヲ演シ、以テ、親王ノ觀ニ供ス、親王、大ニ宴席ヲ設ケ、中外ノ官史ヲ招テ、飲饌スルニ因リ。大使ト、對席シテ、共ニ、火技ヲ觀ル、翌日、柳原、鄭、前驅シテ、郵船ニ附シ、天津ニ赴ク。

八日、大使、平井林等ヲ率テ、筑波艦ニ乘リ、天津ヲ望テ進發ス、龍驤艦ハ、月半ノ大潮ニ非サレバ、出口スル能ハサル故ナリ。

十九日、筑波艦、太沽ニ至ル、水淺クシテ津ニ達スル能ハス、此日、米國郵船、上海ヨリ來テ津ニ進ミ、李仙得、井田總領事等至ル。

二十日、前驅柳原等、天津外國人ノ備用河道汽船ヲ預メ履タル故、此晨、大使平井等ヲ接シテ、天津ニ達セリ。

二十二日、大使、照會文ヲ發シテ、李鴻章ニ到着ヲ報ス。李、即チ、海關道、陳欽ヲ遣シ、安ヲ問ヒ、並ニ、照覆文ヲ送テ、明後日午前十時、署ニ在テ、大使ノ來觀ヲ拱候スト云ヘリ。

二十四日、午前十時、大使、李柳平鄭林ヲ率テ、李鴻章ニ會晤ス。互ニ、皇上萬歲ヲ頌シ、李、盛ニ日本ノ開化ヲ稱シ、去年、清民ヲ救拔シ、陳福勳ヲ延接セラル、ノ厚キヲ謝ス。次ニ、大使、本國外務繁劇ナル故、速ニ條約ヲ換ヘ、入京謁帝、事畢、早日歸國セシムコトヲ述フ、李諾シテ、別席ニ延請シ、酒饌ヲ供ス。

三十日、午前十時、大使、李、平井、鄭、林、大禮服ヲ着シ、李鴻章以下屬員ト、山西公館ニ會同シテ、條約ヲ互換セリ。大使曰、去年、柳原ヲ以テ、臨時商議セシ條々ハ、今度、

公文ニ説明シテ、約後ニ附シ、掲布スベキ處、我國外交ノ權、日ニ進ム處アリ、政府ノ意、將サコ、外民ヲ我管轄ニ歸セシメント欲ス。予今、區々一二ヲ議解スル、何ノ益カアラン、岩倉大使歸朝、一体ノ法立ツヲ俟テ、然後、臨時續約ヲ議立シテ可ナリ、李曰、善、岩倉大臣、改約一定セハ、兩國ノ約モ、亦隨時更張スヘシ、此日、宴席、殊ニ、山海ヲ極ム、後數日間、大使、李ト晤叙スル兩三度、談話機ニ投シ、李甚シ敬服セリ。

五月五日、大使、李以下隨員ヲ率テ、天津ヲ發シ、七日、北京崇文門内金剛衛衛賢良寺ニ館ス、記名江蘇海關道孫士達ナル者、此寺中ニ寓ス、李鴻章ノ命ヲ受ケ、大使京中ノ公務ヲ襄辦周旋シ、甚ク其力ヲ得タリ。

十四日、大使、公法ノ例ニ據テ、柳原鄭ヲ總理衙門ニ遣シ、我國書ノ副本ヲ示シ、大使謁帝ノ日期ヲ既定セシム、總理衙門各大臣コハ、軍機大臣体仁閣、大學士文祥、戶部尙書董恂、吏部尙書毛昶熙、兵部尙書沈桂芬、理藩院右侍郎成林、出席孫士達、陪之、柳原鄭ヲ正席ニ延テ、各大臣環坐ス、柳原、國書ノ副本ヲ出シ、大使ノ命ヲ述ヘテ云、我欽

差大使、貴國皇上ニ謁シテ、親ク國書ヲ呈シ、賀儀ヲ陳ヘンコトヲ望ミ、特ニ、前光等ヲ遣シ、此副本ヲ送リ、以テ、各大臣ノ覽ニ登セ、即チ、奏聞ヲ爲シ、謁見ノ日期ヲ定メ、回答アラノコトヲ請フ、文祥曰、恭親王疾アリ、當ニ、平癒ヲ俟テ、會議ヲ答フベシト、乃チ別ル、歸寓ノ後、大使、孫士達ヲ招キ、總署ノ議ヲ探問ス、孫曰、今春親政以來、各國公使、謁ヲ請ヒ、此論于今不決、一兩日前ニ、約書ヲ造リ、以後、踐行スベキ爲メ、連署鈐印セリ、約書ノ大意ハ、公使謁見ノ節、決シテ跪拜セズ、泰西ノ例、使臣、國君ニ見ユルニハ、只鞠躬スルノミナレトシ、中國皇上ニハ、五鞠躬ヲ作シ、以テ、敬禮ヲ昭カニセント云ヘルニ、諸大臣ノ說ハ、中國、跪拜ヲ以テ禮トス、假令、百鞠躬スルニ、一跪拜ニ替ヘ難シ、然レトシ、兩說ヲ委問シテ、跪拜セシムル乎、鞠躬セシムル乎ハ、應サニ、欽旨ニ遵テ、相定ムベシト云ヒ、又、諸大臣ヨリ、現在五國公使、同日同見ト定ム、故ニ、以後、新來ノ公使アリテモ、數國集マルヲ待テ、同日同見セシムヘシトノ說アレドモ、現在ノ各公使ハ、觀典ヲ開カサル以前ヨリ、待テ待テ今日ニ至リ、同一謁見スル故、異議ナシ、然レトシ、一度ヒ觀典ヲ開テ以後、新到ノ使臣ニ於テ、此

國來ルト雖也、彼ノ國々來ラサル間ハ、謁見ヲ得スシテ可ナリト甘心スルカ否ハ、我輩ノ知ラサル處ナリト云ヒ、然ラバ、先ツ、今度ノ例ヲ以テ、以後、遵照スルモノトシテ、新到ノ公使來テ後、早ク見ユルカ遅ク見ユルカハ、其時ノ談判ヲ、本大臣等、欽旨ニ因テ定ムベシトナト、書テ、之ヲ奏案臣トナセリ、大使、日本大臣ハ、頭等欽差、各國公使ハ、二等以下ナレバ、固ヨリ、彼等ト同儀シ、又同見スベカラズ、必ズ、特別接待ノ儀ヲ論スベシ。

孫曰我國従前、外來使臣ノ等級ヲ論セス、但國書アルヲ以テ、都テ欽差ト唱ヘ、一体ニ敬禮シ、殊ニ、今度一体ノ觀典ヲ開クノ意ナル故、恐クハ別ニ頭等欽差接待ノ儀ヲ設ケ難カルベシ、竊ニ開ク、各國公使云ヘラク、我輩、久ク駐京シテ、今纔ニ謁ヲ得ルニ、閣下、新ニ頭等欽差ヲ以テ、特別ニ觀見セラル、コト甚ク不平也、ト是ニ由テ觀レバ、總署ニ於テモ、今度ノ觀典ヲ嗣後ニ遵行セシメント擬シ、各公使モ、閣下ニ先テ讓ルヲ甘ンセス、閣下ノ望ム處、不知到底如何。

北京に往つて見ると、この以前から、各國の公使と、支那政府との間に、皇帝謁見論といふものが始つて居つて、既に、非常の久しきに亘つても、未だに遷延して、決せず、各國公使も、殆ど困つて居つた。是れは、どういふことかと言ふと、元來、支那が世界の事情に疎いところから起つたもので、外國公使は、列國普通の立禮を用ひやうと云ふに、清廷では各國公使に、支那固有の跪拜の禮を用ひしめやうといふ意見を固く執りて、双方相逕らぬのである。……その跪拜の禮といふは、康熙帝時代、即ち、清朝が最も強盛で、歐洲列國も畏服して居つた時の先例である。その頃、露西亞の使節が來て、康熙帝と面語する時、康熙帝曰く、露西亞の使節が、支那に來た時は、支那の禮を用ふべし、支那の使節が、露西亞に參つた時は、露西亞の禮を用ふべし、と言はれたところから、露西亞の使節は、支那の禮といふものは、それは、いふものといふこと、を知らぬものだから、それに従ふて謁見した處が、何ぞ料らん、使節は、

雨降ちの外に、跪坐をさせられ、康熙帝自身は、宮中の高御座のやうな高い椅子の上に、儼然と尊大に構ゑて居られ、其の上、露國使節の方は三拜九拜の禮をさせたりといふことかある。支那人は、かやうな前禮を守て、いつ迄も、歐米列國公使にやらせうと思ふけれども、今日は、最早うは行かぬ、外國公使、決して之を承知致さぬ、そこで、その歳の春以來、各國公使は、謁見を請ふても、此の禮式論が未だ決せないものだから、各國公使は、誰一人でも、謁見したものはない、唯、國書の寫を總理衙門に出すと云ふをかりであつた………

李仙得ハ、大使ノ頭等ナルヲ以テ、各公使ヲ先ニ來タマ、大使ヲ訪問セシメント、連日、本國及ヒ魯佛ノ公館ニ往テ、之ヲ謁スレハ、允ハサルニ因リ、英國ノ例ヲ援キ、大使微行シテ先ニ各國公使ヲ訪問セヨト勸ム、大使之ヲ聽キ、乃チ行ク、各國公使、旋チ來

テ答禮ス、自是、大使、平井ヲ率ヒ、日々各國公使ト往來シテ、心事ヲ遊説シ、大使ノ器量ニ服セリ。

總署大臣、各公使ト、奏案ヲ約定セシニ、二十數日ヲ經テ、尙ホ未ダ入奏セス、我大使ヘモ、何タル回答ナシ、各公使等、却テ、大使ヨリ、之カ爲メニ、總署ヘ活機ノ論ヲ起サソトヲ冀望ス。

二十五日、大使、柳原鄭ヲ率ヒ、微行シテ總署ニ往キ、各大臣ニ暗會シ、曾テ、我カ爲メニ、入奏セシヤ否ヲ問フ、文祥、仍ホ、恭親王ノ疾ヲ以テ通辭ス、大使、賁ルニ、文大學生、軍機所ニ居レハ、盍ソ親王ニ代リテ、速ニ延見セサルヲ以テス、文祥、極テ内外ノ情實ヲ吐ケル、竟ニ、大使望ム處ノ等級ヲ區別シテ、接待セント云ハカル故、大使、公法ノ根源ヲ基トシ、清國ノ古ヘヲ引キ、今ニ證シテ、飽論、半日ニ及ヘリ。然レハ、文祥ハ、只、各國ノ紛議、更ニ長センコトヲ恐レ、猶豫未決、終ニ曰、且恭王ノ議定回答ス、君之ヲ容レヨト、

二十六日、魯公使ヨリ、大使ヲ晚餐ニ招ク、此夕、各國公使、其書記繕譯委員ヲ率テ畢

ク集リ、次第ニ大使ニ一相見シ、手ヲ握テ均ク「アムハツサドル」ト稱ス、主人。大使ヲ其右席ニ上セ、衆客之ニ陪シ、酒饌ノ次席、極テ敬禮ヲ盡シ、夜闌ニシテ飯ル。是レ、大使ノ頭等ナルノ始ニシテ、各公使、日ヲ分チ、順次ニ、大使ヲ饗ムル、皆此夕ニ同クセリ。

六月一日、恭親王、文詳大臣三四名ヲ率テ、我公館ニ來リ、大使ノ安ヲ問ヒ、照會文ヲ示ス、其略ニ曰、貴國與中國、本係同文之國、是否照行中國禮節、即希貴大臣辨具照覆、

大使、勃然怒テ曰、現今萬國、三尺ノ童子モ、能ク通例ヲ知ル、本大臣ハ、君ニ代リテ、貴國皇上ヲ聘問スル者ナレバ、焉ソグ、中國ノ禮節ヲ照シ行ヒ、貴王大臣ト同ク、跪拜スルヲ肯ンセン哉。貴國尙ホ未ダ、此等ノ事理ヲ明ラメサル、何ソ戀ナルノ甚キ乎、恭、愕口吃シテ曰、予、貴大臣ヲシテ、必ス行ハシメント云フニ非ス、可否回文ヲ答ヘラレヨ、本王大臣等、之ニ據テ議奏スヘシト、此時、王諸大臣坐スレバ、席ヲ安ンセス、惣々別レ去ル。

二日、大使、總署ニ照覆ス、其略ニ曰、本大臣、身奉頭等欽差、代君而來、聲聞四海、各國公使、均已認明、極其推重、夫兩國聘問、在五倫屬朋友、而不屬君臣、本大臣、不敢拜跪、止作三揖耳、

三日、總署、再ヒ回文ヲ大使ニ致ス、其略ニ曰、貴大臣、所稱止作三揖、是既不合泰西之禮、不合中國之禮、實未使據以轉奏、現與泰西各國、議論禮節、改三鞠躬、爲五鞠躬、前日所以相詢者、一則貴國既屬同文、不肯岐視、一則貴大臣與泰西各國大臣、同是友邦使臣、中國視同一律、不分等、現泰西各國之事、擬即具奏、貴大臣面遞國書、禮節究應、何從茲、特再行奏詢、望即照覆以便、與泰西各國之事、併案具奏、否則、奏西各國之事、只可先行入奏、貴大臣面遞國書、一層容再從容商辨可也、

四日、大使、復テ總署ニ公文ヲ送ル、其畧ニ曰、貴王大臣、稱本大臣之止作三揖、是不合中國禮文、不合泰西禮、然則五鞠躬者、果合中西禮節、而可使據以轉奏乎、查本國與泰西、彼此遺接使臣、延見進退、均止三揖、是

爲通例、亦盡在已之敬而已矣、故、本大臣不欲改三爲五、是以、日作覆文直陳忠告、貴王大臣、若以兩國同文之故、責我國使、作爲同人照行拜跪之禮、則爲主者。亦將跪而接之耶、貴王大臣、閱我國書副本、知本大臣是係代君而來、而固執強詞不肯據情入奏、知本大臣方期速了使事回國、而將欲置之於從容商辦者、其意或在拒絕耶、則本大臣復首哉。

是夜三更、大使、不寐、獨中庭ニ步シテ、詩ヲ槐陰ニ吟ス、曰、

豈其吾道非 奉使事多違 笑蜀連和策 風塵一客衣 恐遺耻辱跡 思有變通機 中夜空階步 婆娑林月輝。

六日、孫士達來テ曰、彼此互ニ杭論ヲ生シ、事ニ於テ、何ノ濟アラン、兩君ハ、只一片ノ交誼ヲ懷クニ、臣徒ニ相激スルコトヲ、士達甚タ憂テ、諸大臣ヲ諫メタリ、茲ニ閣下、前比送ル處ノ照覆二件ヲ取還シ、前議ヲ廢シテ、更ニ觀見ノ事宜ヲ議セントス、尊意如何、大使曰、善、

七日、文祥、董恂、沈桂芬至リ、一日以來、彼此往復ノ公文ヲ互ニ還シ舉テ、文祥、一ノ稿案ヲ出シ曰、現在、泰西各國ト觀見ノ禮節ヲ議決セシ奏案ノ内、同日同見スヘキノ儀ヲ定メタリ、閣下ヲ、外國公使同日ニ論スルコトハ非サレトモ、彼等ハ、待ツコト十數載、以テ今日ニ至レリ、今、閣下來テ頭等ニ在ルト雖トモ、前後ノ論ヲ免レズ、故ニ、此奏案ニハ、閣下ヲモ同日展觀セシムルト當セサルヲ得ス、是ニハ、内外ノ煩議有テ本大臣等、遷延今ニ至リ、明日正ニ入奏セント欲ス、閣下、若シ各國ノ禮節ニ依テ、觀見スルニ異議ナクシハ、此一案ニ併セテ、旨ヲ請フト雖トモ、我等軍機大臣ニテ、別ニ具奏ヲ行ヒ、同日同見トハ申セトモ、日本使節ハ、頭等欽差ナルヲ以テ、其時刻ヲ易ヘ特別ニ接見之レアリタシト准定スルコト、本大臣等ノ手中ニ在リ、大使曰、貴大臣等、既ニ我ヲ頭等欽差ト見認メ、特別ノ接見アラシコト可取計段、請ケ合ハル、上ハ、當サニ之ニ聽從スベシ。

八日、孫士達來リ告テ曰、恭親王及文祥等、早朝ニ觀見事宜ヲ入奏セリト、此頃、各國公使、常ニ來テ、大使ノ行事ヲ物色ス、午後、英公使來テ話條問テ曰、生蕃ノ事宜、吾輩日來、悉ク聽テ、皆了解ヲ得、余ハ已ニ貴意ヲ以テ、本國政府ヘ心得ノ爲メニ報知セリ。然レ

他、萬一清ノ政府ニテ、彼地ハ我ニ屬シタル故、政權必ス我ヨリ加フヘント云ハ、將タ之ヲ如何セン、大使曰、此權清ニ在リト云フヲ得サルノ謂跡アリ、生蕃ノ地ヘ、清ヨリ官定ヲ置ケルナク、地圖ニ、生蕃ノ地名ヲ點載セズ、且、數年前、米人生蕃ト戦フ、會テ、清ニ告ケズ、生蕃米人ト結約ス、清之ヲ知ラス、清國何ソ之ヲ屬地ト謂フコトヲ得ゾ。

和蘭公使來テ曰、謁帝ノ論如何、大使曰、聞ク、今早朝ニ入奏スト、因テ思フ、不遠必ス諭旨アラシ、公使曰、今日ノ事、全ク閣下ノ鼎力ニヨリ出テタリ、閣下、總署大臣ヘ論難セシ公文ヲ、米公使ノ手ヨリ窺見ス、若シ、此議ナク、只、我輩公使ニ任セテ擔當セシメハ、更ニ、幾月ヲ延ハスモ亦不可知ト、各國公使、皆閣下ノ恩惠ヲ感シタリ。

十五日、上諭ニ曰、

總理各國事務衙門奏、各國駐京使臣、領請觀見、呈遞圖書、一摺、現在實有國書之駐京各國使臣、著准其觀見、欽此、

六日、孫士達來テ、總署ノ内評ヲ漏報ス、曰、觀見ノ日、各國公使ヲ頭班ト爲シ、日本

使節ヲ次班ト爲サント擬ス、大使曰、各使已ニ余ヲ認テ頭等ト爲シ、又總署大臣モ亦頭等ヲ以テ特別ノ接見アレト奏准セシコトヲ相許セリ、而シテ、如此顛倒スルハ何ソヤ、孫曰、一ニハ、中國外使ヲ接待スル從前等差ヲ別タズ、二ニハ、各國公使久ク京師ニ駐シ、今日漸ク觀見ヲ得ルモ、亦等閑ニ非ス、日本使節ハ、特別ノ聘問ト雖モ、吾ヲ以テ之ヲ觀ルニ、均ク是、一般ノ好友ナレハ、未ダ判然區別スルニ便ナラズ、故ニ、各國ヲ頭班ニ總觀セシメ、日本使節ヲ次班ニ獨觀セシメ、一ハ以テ、先輩ヲ昭ニシ、一ハ以テ、特別ヲ表セントナリ、竊ニ聞ク、一ノ公使アリテ、閣下ニ頭班ヲ讓ルコトヲ肯セサルニ因テ然リト、大使曰、本大臣、及ヒ各公使ハ、皆客ニシテ、貴國皇上ハ主也、頭等ヲ頭班ニ接シ、次等ヲ次班ニ接スルコソ、主人ノ本意ナルベキニ、總署若シ外人ノ言ニ泥テ然カセハ、政府自ラ主權ヲ墜シ他國ノ牽制ヲ受ルニテ、最モ憐ムベキニ堪ヘタリ、總署、明日我ヲ呼テ禮ヲ演ス、其時、必ス之ヲ面論セン。

十七日、大使、鄭ヲ率テ總署ニ往キ、文祥ニ晤會シ、演禮スルニ及ハス、先ツ觀見ノ班次ヲ問フニ、答フル所、昨日孫ガ言ヒシ意ト同ク出ツ、大使、國ノ大權通使ノ例ヲ舉ケ、

討論至ラサル處ナシ、然レハ、彼レ、但己ガ意ヲ膠執シテ、大使ノ説ヲ聽カズ、途ニ別ル。

二十日、大使、柳原鄭ヲ總署ニ遣ハシ、謁帝ノ義ヲ謝斷ス。總辦ノ郎官四名出テ接ス、柳原曰、貴國未ダ接使ノ道ヲ解セズ、副島大臣、意ヲ決シテ親見ヲ願ハズ、徑テ本國ニ回り、暫ク貴國ノ禮典當ヲ得ルヲ待テ、而後、再ビ來リ、我君善隣ノ意ヲ貴國皇帝ニ面奏セント、此外ニ、兩國和好ヲ保全セント欲シテ、貴政府ニ告ルコトアレハ、我大臣ハ、某等ヨリ貴署大臣へ面告セヨト命セラレタリ、今日、堂官出席ナシ、某等、明日再ビ貴署ニ上ラン、請フ此意ヲ傳ヘヨ、話畢テ乃チ別ル。

謁見のことには決定したけれども、清廷は從來の慣用手段で、わざと時日を遷延さするやうな有様であつた、……………その頃、丁度、皇城の御火災のことが聞えて來たから、それを辭柄にして、清廷大臣を責め

てやつた……………日本天皇陛下からは、清國皇帝陛下の成婚親政をも賀せらるゝと云へ、日本皇城の火災に對しては、貴國からも慰問の使節でも遣はさるべき譯である。然るに何ぞや貴國は日本に對して是等の當然の禮を致されざるのみならず、すでに十分辨論をついた本官謁見の事も、彼れ是れ言を左右に託して遷延さゝるといふは、甚だ相濟まぬことである。自分は、皇城の火災、彼れ是れ容易ならぬことがあるによつて、急いで歸國するといふことを、嚴しく照會してやつた……………

二十一日、大使、柳原鄭ヲ總署ニ遣ハシ、臺灣生蕃事件ヲ説明セシム、總理大臣毛昶熙、董恂、及ヒ記名道孫士達接話ス。

我曰、我副島大臣、謁帝ノ義ハ、昨日既ニ謝斷シ、即チ歸裝ヲ促セリ、然レハ、我大

臣、愈兩國和好ノ鞏固ナランコトヲ冀ヒ、特ニ、某等ヲ遣ハシ、貴政府ニ告ク、茲ニ、
 臺灣ノ地ハ、往昔、我國人及ヒ和蘭人、次ニ、鄭成功ナド、嘗テ占據シタリシヲ、貴朝
 ノ版圖ニ歸セリ、而シテ、貴國僅カニ半偏ヲ治メ、其東部ニ在ル土蕃ノ地ハ、全ク政
 權ヲ施及セス、蕃人自ラ獨立ノ勢ヲ張リタルガ、一昨年冬、我國人民彼地へ漂泊セシ
 ヲ掠殺ス、故ニ、我政府、將サニ使ヲ出シテ其罪ヲ問ハントス、惟蕃域ト貴國ノ府治
 ト、犬牙接壤シタリ、我大臣以爲ク、未タ貴國ニ告ケスシテ、此役ヲ興シ、萬一、貴
 轄へ聊モ波及スルコトアリ、端ナク其猜疑ヲ受ケナハ、兩國、自是和ヲ傷ハント、此
 憂慮アリ、故ニ、以テ豫シメ説明スル所ナリ。

彼曰、本大臣等只生蕃ノ琉球國民ヲ掠殺セシヲ聞ク、未タ貴國人ニ係ルコトヲ知ラズ、
 抑モ、琉球國ハ、是レ我藩屬ナレハ、彼時、琉民ノ生蕃ヨリ脱出シ來ル者ヲ、悉ク我
 官吏ヨリ救恤シテ、本國へ送り還シタリ。

我曰、我朝琉球ヲ撫字スル最モ久ク、中葉以降、薩摩ニ附庸タリ、況ンヤ今、大政日
 新、一民モ其臣ニ非サルナキヲ以テ、彌々、撫恤ヲ務ム、一ノ野蠻、我王臣ヲ害スル
 ヲ見テハ、我君保民ノ權ヲ用テ、專ラ其冤ヲ伸ヘサルヲ得ズ、而テ、琉人ヲ我國人ト
 謂フ何ソ妨ケン、且問、貴國官吏、既ニ琉民ヲ救恤スト云フ、不知、其暴殺ヲ行ヘル
 生蕃ヲ如何セラレシヤ、彼曰、此島ノ蕃民ニ生熟兩種アリ、從前、我王化ニ服シタル
 ヲ熟蕃ト謂ヒ、府縣ヲ置テ之ヲ治ム、其未タ服セサルヲ生蕃ト謂フテ、之ヲ化外ニ置
 キ、甚ク理スルコトヲ爲サ、ルナリ。

我曰、貴國ノ、初メヨリ、彼蕃、他國ノ漂民ヲ掠殺セシコト、凡ソ數次アレトモ、貴
 國會テ處分セス、蕃益暴橫ナル故、今若シ、他國ニ征セラレナハ、豈ニ唯蕃地ノミナ
 ラン、即チ、府縣モ或ハ貴國ノ有トナラサルヘシ、此後、殺人ノ故ヲ以テ、此島ヲ外
 國ニ占據セラレ、即チ、安南廣東及ヒ黑龍江、我國北蝦ノ如クナリナハ、我南海中ニ、
 一ノ患害ヲ生シ、諸島ノ危ヲ致ス、是ヲ以テノ故ニ、我政府、直チニ往テ之ヲ征セン
 ト謀ル、然レハ、我大臣ハ、兩國ノ好誼ヲ保重スル爲メニ、姑ク、衆諍ヲ制シ、此奉
 使ノ便ニ因テ、貴政府ニ明告シ、其猜疑ヲ避ケ、然シテ後、化外ノ地ヲ理スレハ、全
 ク貴國ニ干涉セス、侵越ノ憂ナカルヘシ、此事ハ、我政府本ト告グルコトヲ欲セス、唯

我大臣、外務ノ重任ニ在ルヲ以テ、若シ一ノ小醜ヲ懲ラスニ因リ、隣國ノ和ヲ失フニ至ラハ、何ヲ以テ天下ニ對ヘン、且、我國勇敢ノ士、瑣民遭害ノ事ヲ聞ク者、皆爲メニ切齒シテ、憤懣胸ヲ填メタリ、政府、問罪ヲ策シテ、此氣ヲ消散セシメサレハ、勢必ス激亂シテ滔々乎防シ能ハス、境ヲ越ヘ寇ト爲ランコト、日ヲ待タサルベシ、是亦、兩國端ナク和ヲ傷フノ源ニシテ、萬一茲ニ至ラハ、則我皇帝、今日我大臣ヲ遣ハシ、貴國皇帝ヲ聘問シ、換約締好スル、畢竟何ノ用ニ屬スルヤ、是我大臣ノ公心上ヨリ來ル一團ノ好意ナリ、請フ之ヲ諒察セヨ。

彼曰、生春ノ暴横ヲ制セサルハ、我政教ノ及ハサル所ナリ。然レバ、福建ノ總督、琉民ヲ救護セシ奏報ノ書アリ、猶ホ、檢査シテ、他日復答スルヲ待タレヨ、
我曰、貴國ノ京報ニ據テ、此奏ヲ看タレハ、我國之ヲ知ラサル者ナシ、今我大臣、歸心如箭、惟兩國ノ好メヲ思ヒ、一言告明シテ去ルノヨ、何シ他日ノ復答ヲ待ツニ暇アラント哉、ト話畢テ乃チ別ル、

この談判の要旨は既に世人に知られて居るものもあるが、亦拙者ど柳原と通譯官の鄭とよ外には知らないこともあるだらう……………其の時拙者が柳原に授けて問はせた事の中で、重なる調答をいふて見ると、……………

日本大使代理柳原は、先づ最初に、
澳門は全く葡萄牙國に永久讓與せられたる土地であるか、
と問ふた、清國大臣、
やはり清國の領地であるが、唯葡萄牙國に永年無期限に貸して在るのみである。

と答へた、その次に、日本大使代理は、
先年佛國と米國どが朝鮮を討つた時に、朝鮮は清の屬國であるや否、と照會したとき、貴國は之に答へて、朝鮮は封冊正朔を興ふると雖も、その内治并に和戦には、清國は關係せずといふ御答

が。あ。つ。た。其。の。答。書。の。寫。本。は。こ。の。通。り。米。國。公。使。よ。り。貰。ひ。受。け。所。持。し。て。居。る。が。現。今。に。於。て。も。貴。國。と。朝。鮮。と。の。關。係。は。此。答。書。の。通。り。に。て。變。更。は。な。き。か。

と問ふた、その答に、
その通りである。

と答へた、それから、日本大使代理は、

臺。灣。生。蕃。地。と。い。ふ。も。の。に。は。清。國。皇。帝。の。主。權。威。力。教。化。が。能。く。及。ぶ。か。否。……先。年。生。蕃。地。で。米。國。漂。流。人。が。虐。殺。せ。ら。れ。た。時。に。米。國。軍。艦。は。生。蕃。を。砲。撃。し。た。け。れ。ど。も。ろ。の。節。貴。國。政。府。は。そ。の。事。を。不。問。に。付。せ。ら。れ。た。が。今。日。に。至。り。て。も。其。頃。と。同。様。に。し。て。生。蕃。地。で。起。つ。た。外。國。人。の。殺。害。と。か。財。産。の。掠。奪。と。か。は。貴。國。政。府。で。は。一。切。關。係。せ。ら。れ。ざ。る。や。

と問ふた、これも、

一切關係なし。

と答へたこの談判によりて、三箇條の確答を獲た……………

* * * * *

二十二日、大使、隨員ニ行李ヲ束装セシム。

二十三日、隨員樺山資紀、兒玉利國、視察成富忠藏、前驅トシテ發程。

此夕、文祥、孫士達ヲ遣シ來テ、大使ニ、意ヲ致シ、明日自ラ來テ、再ヒ、觀見事宜ヲ改議セント請ヒ、士達婉轉ト勸慰ス、大使、曰ク、日本大臣、言出テハ、必ス行フ、否レハ、則以テ、外務ヲ統フルコト能ハス、今既ニ歸装ヲ催促シタレバ再ヒ留マルヘカラス、孫曰、士達ノ不才ヲ以テ、恭ク李中堂ノ知遇ヲ享ケ、總理衙門ニ行走シテ、外、國事務ヲ襄辨ス、前年八月、伊達大臣ニ陪隨シ、其議約ヲ成シテ、津ヨリ京ニ上下シ、今年、又京城ニ在テ、閣下ノ使務ヲ襄辨スルハ、皆、李中堂、貴國ヲ重ンシ、交誼ヲ厚クセント欲シテ、深ク委ネラル、處アルニ依レリ、閣下前月以來、總署大臣ト觀

事ヲ議スル毎ニ、必ス消息ヲ李府ニ通シ、而シテ、李中堂、窃ニ閣下ノ爲メニ、封事
上疏スル已ニ再三ナリ、今文中堂閣下ノ歸裝スルヲ聞キ、悔悟措ク所ヲ知ラス、轉々
士達ニ托シテ、閣下ヲ勸解セシム、仰キ祈ル、即チ文中堂ノ請フ處ヲ允シ、兩國ノ好
ヲ成全シテ、李中堂ノ志ヲ遂ケシメンコトヲ、大使曰、余固ヨリ李中堂君國ヲ愛スル
ノ深キヲ信セリ、好シ、貴道ノ誠忠ヲ念フテ、明日文中堂ニ接セン、然レハ、前日貴
政府ニ對シテ、説明セシ一事ハ、即チ觀見ヲ遂ルニ廢スヘカヲサルナリ、貴道必ス、此
意ヲ中堂ニ致セ、孫唯々トシテ去ル。

二十四日、文祥、沈桂芬、董恂、孫士達ヲ率テ來リ曰ク、本大臣等、閣下ノ頭等ヲ認メ、
各公使ニ照會シテ、日本大使頭班ニ獨觀シ、退出スルヲ俟テ、各國同班觀見スベキ旨ヲ
達セリ、明日、將サニ、皇上各使ヲ接見スルノ殿閣ヲ請ヒ定メ、且ツ入以ノ儀註ヲ書シ
テ、各使ヲ總署ニ邀同シ、更ニ恭王ト演習スルヲ要ス、茲ニ、儀註ノ稿案ヲ呈シテ、
閣下ノ可否ヲ請フ、大使曰、斯クノ如クシテ、稍々本大臣ノ意ニ符ス、本大臣己ムヲ
得ハ則己マシ、但、儀註ハ我熟考シテ回答スルヲ容レヨ、本大臣且曰、且サニ行カン

トスルニ因テ、已ニ各國公使ト訣別シタレバ、尙ホ須ク此由ヲ相告クヘク、兎モ角、
明日意ヲ決シ、並ニ儀註ノ可否ヲ貴署ニ報告セン、諸大臣叮嚀相勸メテ去ル。

二十五日、大使、總署ニ遣ハン、此儀ニ依テ觀見スベシト答フ、董恂、沈桂芬曰、大使
若シ異議ナクシハ、此儀註ニ畫押シテ、以テ憑據ヲ昭ニセヨ、鄭復命ス、大使之ヲ拒
ム、

二十六日、大使孫士達ヲ呼ヒ謂テ曰、總署余ニ儀註ニ畫押セヨト云フ、彼レ本大臣ヲ、
此等ノ接待ヲ得テ、滿意スル者ト謂フ乎、貴國接使ノ禮ニ通セス、自ラ國權ヲ墜シ、
テ各國公使ト儀ヲ爭フコト半年、而シテ、約書ヲ成シテ調印ス、本大臣獨リ之ヲ爲サ、
ニ、貴國自ラ萬國相違フノ禮ヲ制シテ、外使ヲ接セヨト、前月以來諄々説解スレハ、聽
ス、延テ、今日ニ至リ、尙ホ此義ヲ開悟セス、自家尊大ノ禮ヲ強ヒテ、外使ニ行ハシ
メント欲フルヨリ、惟外人ノ遵ハサランコト是レ恐レテ然リ、此義ハ、本大臣全ク意
ニ適セス、但貴政府ノ拘泥無斷、未ダ萬國公法ヲ採用シテ、天下ノ人ト交接スル能ハサ
ズラ怒ルシ、己ムヲ得テ己ムモノナリ、何ソ畫押スルヲ爲ン、孫去テ、儀註ニ照會ヲ

副へ來り、貴大臣已ニ閱蕃ストノ照覆アラソコトヲ請フ、之ヲ與フ、此時開ク、各國公使モ亦、一昨日總署ヨリ照會セシ班次ノ儀ヲ、皆俱ニ承允シ、惟儀註ニ畫押スルコトハ、大使ニ仿テ之ヲ拒ムニ因リ、同ク照覆ヲ取テ事ヲ了リント、午後、恭親王孫士達ヲ遣ハシ、大使ヲ總署ニ邀ヘテ、共ニ觀禮ヲ演セント請フ、大使起ツ、王諸大臣、廳上ニ迎へ入ル、座中各公使及ヒ譯官二名在リ、一齊起立敬接シ、致テ先ニ坐セス、親王、日來議定セシ觀儀、及ヒ宮殿憩房ノ畫圖ヲ展ヘ、別室ニ玉座ノ狀ヲ假設飾飾シテ、衆ヲ延キ演禮セリ、

二十七日總署ヨリ照會ヲ送テ曰、本日上諭ヲ奉シ、本月初五日、即我六月紫光閣ニ在テ、二十九日各國使臣ヲ接見スト、別ニ書啓ヲ副ヘテ曰、觀スルノ日、午前、本衙門差辨ヲ派シテ前導シ、西安門内公所ニ至テ伺候シ、本衙門大臣ヨリ儀ヲ整ヘ迎へ入閣スベシト、此日我皇上ヨリ、清帝へ賀儀ノ贈品、及ヒ諸大臣孫士達等へ、副勞禮物ヲ總署ニ搬送ス、其賀品ハ、總署ヨリ、即日内宮へ遞納セリ、

二十八日、大使照會ヲ繕備シテ總署ニ送り、魯公使ヲ、以後、日本使務ノ代任ト爲シ、井田總領事、品川領事ヲ上海ニ、林副領事ヲ香港へ駐在セシムルニ因リ、其接遇アラソコトヲ請フ、總署覆允セリ、

其の頃露西亞の支那に於ける勢力は、今日ほどには無うて、英國の勢力は、甚盛なるものであつた。當りまへなら、英國へ托して置く筈であるけれども、殊更に意外なる露西亞公使に托して置いたのは、内々、英國の外に露士亞といふものがあるぞ、といふことを見せるつもりであつた。外交の機は往々斯様なこともあつたものだ。……露西亞公使はウランガリーといふて樺太の事に關して、日本と露士亞との事情もよく知つて居る人であるものだから、都合がよかつた。勿論日本公使兼任のことも、直に承諾された。……

二十九日、午前四時、大使鄭ヲ率ヒ、大禮服ヲ着テ乗騎シ、孫士遠陪隨シテ、總署差辨
 兩騎ニ前導セシメ、六時、西安門内天元閣ニ至テ暫ク憩フ、時ニ總署大臣成林、騎從
 千余人來テ接シ、前後ヲ擁シ、福華門外ニ至テ下橋シ、門ニ入ル、大使、鄭二人ノ
 門内ヨリ、文祥沈桂芬、董恂等出迎ヒ、成林導キ、時應宮ニ入テ憩坐ス、座上茶菓滿
 案、其精巧ヲ極メ、約シテ數十品ナリ、各國公使及譯官二名ハ、福華門外明代所建ノ
 天主堂ニ集リ、總署大臣ニ導レテ、陸續至リ齊フ、文祥等迎接事畢テ入來リ、衆使、
 茶菓ヲ進メテ曰、皇上ヨリ賜フト、衆席ヲ正フシテ之ヲ嘗ム、七時發鑿、毛潤熙大使
 ヲ導キ紫光閣傍ノ行帳中ニ至テ伺候ス、各公使續テ至ル、帝八時宮ヲ出テ、九時紫光
 閣ニ御ス、寶毛二大臣、大使鄭ヲ引テ閣ノ左階ヨリ昇リ、左門ヨリ進ム、鄭國書ヲ捧ケ大
 後テ從 大使鄭、初メ進ミ、斜メニ御座ヲ見ル、時ニ帽ヲ除キ、第一揖ヲ作シ、中央ニ
 進ミ、正シク御座ニ向テ、第二揖ヲ作シ、又進ンテ、御前ニ据ヘタル黃案ノ前中央ニ
 立止リ、第三揖ヲ作ス、之ヲ進見ノ鄭ハ、大使左肩ノ脇一步後ニ開キ、寶毛二大臣ハ黃
 案ノ兩側ニ開キ、北面シテ立ツ黃案ヨリ數歩、北ノ正面ニ壇ヲ張リ、壇頭ニ高座ヲ設

ケ帝其上ニ蟠坐シ、座ノ左右ニ恭親王及ヒ皇族ノ御前大臣侍立シ、軍機大臣、六部
 尙書、文武ノ顯官、壇下ヨリ黃案迄ノ兩傍ニ分レテ對立シケリ、大臣國書ヲ黃案ノ上
 ニ安置シテ、一齊シ、來意ヲ陳頌シテ、鄭ニ譯述セシメ又揖ス、帝答フル處アリ、恭
 親王跪テ之ヲ奉リ、階ヨリ降テ黃案前ニ來リ、宣ヘテ曰、貴國大皇帝ノ國書ハ、朕收
 到シ了ルト、大使揖ス、恭親王復班ス、帝又勅語ス、恭親王又跪奉シ來リ宣ヘテ曰、貴
 國大皇帝安康ナルヤ、兩國交際事宜ハ、親ク總理各國事務衙門ト、公平商議シテ可ナ
 リト、大使揖ス、此間排次ヲ定メス恭親王復班ス、既ニシテ、大使又一揖シ、鄭ヲ從ヘ背行シテ
 退キ、中央ノ盡ル處ニ至テ一揖シ、轉シテ、尙ホ背行シ御座ヲ睽離セントスル處ニ至
 テ一揖セリ、之ヲ進出ノ三揖トナス、于是帽ヲ戴キ寶毛二氏仍ホ導テ時應宮ニ至リ、憩息ス、之ヲ頭班
 ノ獨觀トナシ、第二班ハ、乃チ魯米英佛蘭五國公使同觀ニシテ、各始メ來テ駐京セン
 時遞スヘキ國書ヲ、今日呈スルナリ、各自ニ譯官ヲ帶フルコトヲ准ルサ、ル故、獨逸
 公使館ノ翻譯官ビスマルク一名、之ニ從フ、偏ナキヲ取ルナリ、觀畢テ、四國公使去
 ル、佛公使、獨リ留リテ、自己ノ譯官ヲ用ヒ、前年清ノ來使ニ與ヘテ、清帝へ答フ

へキ新統領ノ國書ヲ、此公使去年持來リシヲ、今日特別ニ呈スルナリ、之ヲ第三班トナセリ、大使ハ、各國公使時應宮ニ歸齊スルヲ俟テ、均ク、總署大臣ニ謝シテ辭出ス。文祥以下諸大臣、皆送テ福華門ニ至リ相別ル。大使歸館、正ニ十一時ナリ、此日正午、帝命シテ、各使ヲ總署ニ宴シ、文祥ヲシテ客ヲ領セシム、文祥意ヲ致テ曰、天時炎熱、盛服ヲ庸ル母レト、大使鄭ヲ率ヒ、通常服ヲ衣テ宴ニ赴ク、文祥坐ヲ司リ、孫士達之ニ陪ス、饌六十種、給事俊潔ナリ、酒酣ニシテ、炙リタル豕羊鷄鴨ヲ、四ツノ大盤ニ盛リ、堂上ノ紅案ニ排列ス、文祥坐ヨリ大使ニ謂テ曰、皇上遠使ヲ饗センカ爲メ、特ニ、内厨ヨリ饑リ至ルト、大使起揖シテ之ヲ受ケ、杯ヲ舉テ頌謝シ、歸テ館舍ニ頌セリ、各國公使至ラス、天熱キヲ以テ辭ス、聞ク、其宮殿ニ宴セサルヲ嫌フニ因テ然リト、後、大使、其固ニシテ敬ヲ失ヘルヲ論ス、魯公使曰、威爾氏ノ言ニ聽從セシマシムト、

當日、謁見の禮を終つてから、其席で、皇帝陛下から酒饌を下さるが、御承知かど云ふことであつたが、各國公使は相談して、丁度、其時は非常の盛暑であつたから、皆御馳走を謝絶せられた、そこで、日本大使も御同様であるかど云ふて、清廷大臣が問ふたから、否然らず、日本大使は欣然として、食事を戴くと斯うやつた、そこで、支那諸王大臣等も、日本大使禮あり之に反して、彼歐米諸國の使臣等は、人の君父を辱かしむる者也、と云ふ評をしたと云ふことであつた.....

此日、各公使、謁見ノ時、初メ進テ、黄案前迄ニ、三鞠躬を作シ國書ヲ呈シ、陳頌シテ、一鞠躬シ、勅語ヲ承テ、一鞠躬シ、乃チ退キ、之ヲ五鞠躬ノ誠敬トナセリ、後一ノ大臣、宮中ノ言フ洩テ曰、皇上云フ、日本公使禮節態度最モ佳シト。

三十日、恭親王及ヒ九大員、委員ヲ遣ハシ、大使ニ名刺ヲ送テ、昨日觀事完畢シシヲ賀ス。

七月一日、大使、出テ各國公使ニ別テ告ケ、彼等亦來テ行ヲ送ル。
 二日、總署ノ委員、清帝ノ答儀、計十二品、及、王諸大臣孫士達等ノ餽物ヲ齎シ來ル。
 三日、寶璽、董恂、沈桂芬、帝ノ復書ヲ捧ケ來ル、大使鄭ヲ率ヒ、大使服ヲ着テ、之ヲ
 接收ス、三大臣、因テ王諸大臣ノ辭ヲ述ヘ、大使ノ行ヲ送ル、大使、名刺ヲ孫士達ニ
 託シテ、總署王諸大臣ニ回謝ス。

その時の謁見については、諸外國の公使は、皆、日本大使の態度に餘程
 注意した者と見ゆる。此謁見の終つた翌朝、英吉利公使ウヱード氏は、
 拙者の旅宿に來訪せられて、今般日本大使の盡力は、謝せざらんと欲
 す。雖ども謝せざるを得ません。貴大使が清廷に於る、外國使臣の立
 禮を確定し、且つ、大使公使等の順序を能く立てられた事は、我輩も真
 に其賜を享けましたと云ふて、懇に之を謝せられた。又拙者が清廷の

緩漫因循を憤はつて、斷然と途中で歸ると云ふ舉動を示した時に、露
 西亞公使は、本國に向て、副島が牙を現はしたと云ふ電報を發せられ
 たと云ふことであつた。

午後三時、大使一行隨員、北京ヲ發シテ、通州ニ至リ舟ニ泊シ、翌朝、纜ヲ解テ北運
 河ヲ下ル。

六日、舟、天津ニ抵リ、大使、陳欽ヲ訪テ謝勞シ、因テ、即日、李鴻章ニ晤別センコト
 ヲ詢ハシム、午後、陳來リ復シテ云、李中堂、頃日、弟ノ喪ニ在リ、明日權リニ制ヲ
 除テ、恭ク大駕ヲ候スト。

七日、大使、柳原、鄭ヲ率テ、李鴻章ニ晤ス、陳欽、丁壽昌陪坐ス、大使、李ト過來ノ
 事ヲ談スル、李自ラ、總署ノ薄待ヲ謝シ、外人ニ五鞠躬ヲ以テ、欺カレタルヲ悔ミ、將
 來自國ヲ開化スルニ、規畫ヲ日本ニ探訪セント欲シ、及ヒ、秘魯議約ヲ詢フテ、續維

盡ルコトナク、別ニ臨テ涙ヲ拭クニ至レリ。

八日、大使、李ト手書贈答シテ、別ヲ作シ、又、謝帖ヲ留テ、總署王大臣孫士遠等へ託送ス、此日、陳欽、李鴻章ニ代テ、鎮海號ノ汽艦ニ乗テ、先ニ白河ヲ下リ、大使ノ船ヲ沽門ニ待チ、以テ、送別ノ情ヲ盡サントナリ。

午後十時、大使一行隨員、米國郵船ニ乗テ泊ス。

九日、曉天、開流、紫竹林ヲ發シ、正午行テ太沽ニ抵ル、此邊、所在兵隊ノ行營、悉ク旌旗ヲ飾リ、沽門東西大砲營ヲ望ム、中軍提督ノ大艦ヲ駐テ、橋上ニ、各七十二旗ヲ環挿シ、埠前ノ岸頭ニ、各二十八旗ヲ翻シ、炎日ノ下ニ、銃兵每五百餘ヲ整列セリ、陳欽ノ乗リタル鎮海艦ハ、河道ノ西偏ニ碇泊シ、我船過リ近ヨルヲ望見シテ、清艦長將臺上ヨリ英語ヲ以テ、我船長ニ、暫ク流ヲ停メヨト云ヒシマ、艦ノ中樞ニ、日章旗ヲ掲ケ、砲十九發ス。大使、衆員ヲ率ヒ、船頭ニ立チ、帽ヲ除キ、禮ヲ爲ス、陳欽艇ヲ駛セ、我船ニ來リ、大使ニ安ヲ問ヒ、次ニ、砲營提督、鎮海艦長ノ名刺ヲ呈シテ代候シ、又、瓜果ヲ饒ス、大使、陳ト酒ヲ酌ミ、謝詞ヲ李鴻章ニ致シテ毒ト爲ス、陳

乃チ握別シテ去ル。我船、即時流ヲ開キ、雙營ノ間ヲ過ク。兩岸ヨリ鼓吹迭ニ奏シ、銃隊銃ヲ捧ケテ式ヲ行ヒ、一齊ニ發砲シ、間ニ、營中ノ大砲數聲ヲ交ヘテ、祝スル再三ニ及フ、我船己ニ海ニ出去レテ、敢テ隊ヲ解カス、行テ瞻望及ハサルニ至リ、始テ散開スルヲ見タリ、艦長、大使ニ見ヘ謝シテ曰。我船、幸ニ大使ヲ載セテ、清國未曾有ノ盛舉ヲ觀ル得タリト。

十日、午前十時、行テ芝罘ノ口外ニ抵リ、我船、信號ノ旌ヲ掛ク、口内、龍驤號波兩艦ヨリ旌號ヲ望見シテ、即チ砲十九發シ、艦上大呼歡迎シテ、聲數里ニ聞ニ、諸國ノ商船、適々旭章ノ旌旗アルモノハ、亦各、中樞ニ掲ケテ、祝意ヲ表ス、我艦船ノ邊ニ由テ去ル、提督、艦長、士官、海兵、悉ク威儀濟々トシテ、大使ヲ以テ禮ヲ行フ、艦邊ヨリ、我船定泊所ニ到ルノ水路ヲ救護シテ、兩艦ノ兵艇ヲ布列シ、我船、此間ヲ過リ其艦ニ並フ毎ニ、艇兵各漿ヲ堅テ、式ヲ行フ、大使一々帽ヲ除キ、之ニ應シ、船停ル伊東少將、福島、伊藤等、即チ來テ大使ノ動安ヲ慶賀シ、各々相叙シテ、大ニ喜ブ十二時、龍驤艦ヨリ將軍艇ヲ發シテ、大使ヲ接取ス、平井、鄭及ヒ田中等之ニ從ヒ、林

ハ筑波艦ニ乗ル、此日午後四時、李仙得、柳原、吳、高尾、西河等、原ノ郵船ニ在テ上海へ出發ス。

十一日、午前二時五十分、龍巖筑波兩艦、芝罘ヲ出發シ、東ヲ望テ旋ル。

二十一日、午後十時、兩艦行テ、兵庫ニ抵ル、翌朝、柳原上海ヨリ歸テ神戸ニ至ル、

二十三日、午後五時、兩艦及ヒ柳原ノ郵船、兵庫ヲ出發ス。

二十五日、曉天、柳原夜分兩艦横濱ニ着ス、

二十六日、曉天、大使平井鄭林ヲ率テ上陸、午前十時、共ニ汽車ニ駕シテ進京、外務

少輔、上野景範以下官員、畢シ新橋須停驂ニ集リ、以テ大使ヲ迎へ、車馬追從シテ邸

ニ入ル。

二十七日、午後一時、大使柳原平井鄭林ヲ率テ、太政官代ニ詣テ、太政大臣及ヒ參議ニ見

へ、柳原以下三名土方大内史へ見へ、到ルヲ告ケ、五時赤坂皇居ニ參内ス、式部助五

辻安仲、大使ヲ接シテ曰、聖上卿ヲ俟ツト、即チ大使及ヒ書記四名ヲ引テ、天顏ヲ拜

セシメ、上大使ヲ慰勞シ賜フ、書記官退シ、大使成功ヲ復命シ、退テ書記官ト共ニ、

八景閣ニ於テ酒饌ヲ賜ハル。

明治六年十一月

外務少丞鄭永寧編纂

歸朝の當分に、各國公使が一同揃ふて、訪問して來て、是まで言ひた
いけれども、氣の毒ながら、今日以後眞に獨立國の外務卿で接遇いた
すと云ふて、宴會を開かれたこともあつた、……

あの時の隨行員で、談判に與つた人は、皆死んでしまはれて、今は、もう、
一人も無なくなつた、樺山は、大將でまだ居らるゝが、あれは、談判には
與らなかつた、……柳光前光君も、ずつと以前に亡くなられた、平井
も死んだ、鄭永寧も一昨年から死んだ、……人はよく死ぬものだ、……

原

使事完成持節還。歸職身世未全閑。

通州夜雨感曾夢。宜國清風咫尺間。

附錄 終

書精神教育後

川崎君又次郎者。溫厚篤恭之士也。與余同受教於蒼海老先生之門。蓋有年焉。先生之見講話也。君隨筆記之。歲月之久。哀然成一冊。君獨潛心覃志。深秘不示人也。而人多知君游先生之門。返

欲就君聽。先生之說。君自研鑽工夫之未暇。何能語之他人哉。而人實強之不已也。君乃摘錄其筆記中專關教育之說話而示之。以塞其責。人曰。詎上梓以裨益同志之士哉。人之慫慂而不已。君亦不得辭也。乃終附剞劂。名曰精神教

育。孔子曰。道聽而塗說。德之棄也。川崎君恐其或類焉。乃使余叙其本末。余深諒君之心。亦安得辭之。乃書其事。歷辨之。若夫如先生之學與識。世既有定論。余何贅焉。明治三十一年首夏。識於千駄谷副島邸。

同門友弟 佐々木哲太郎拜稿

明治三十一年六月十三日印刷
明治三十一年六月十七日發行

定價	上製 金六十錢
價	和製 金五十五錢

編輯者 川崎又次郎

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

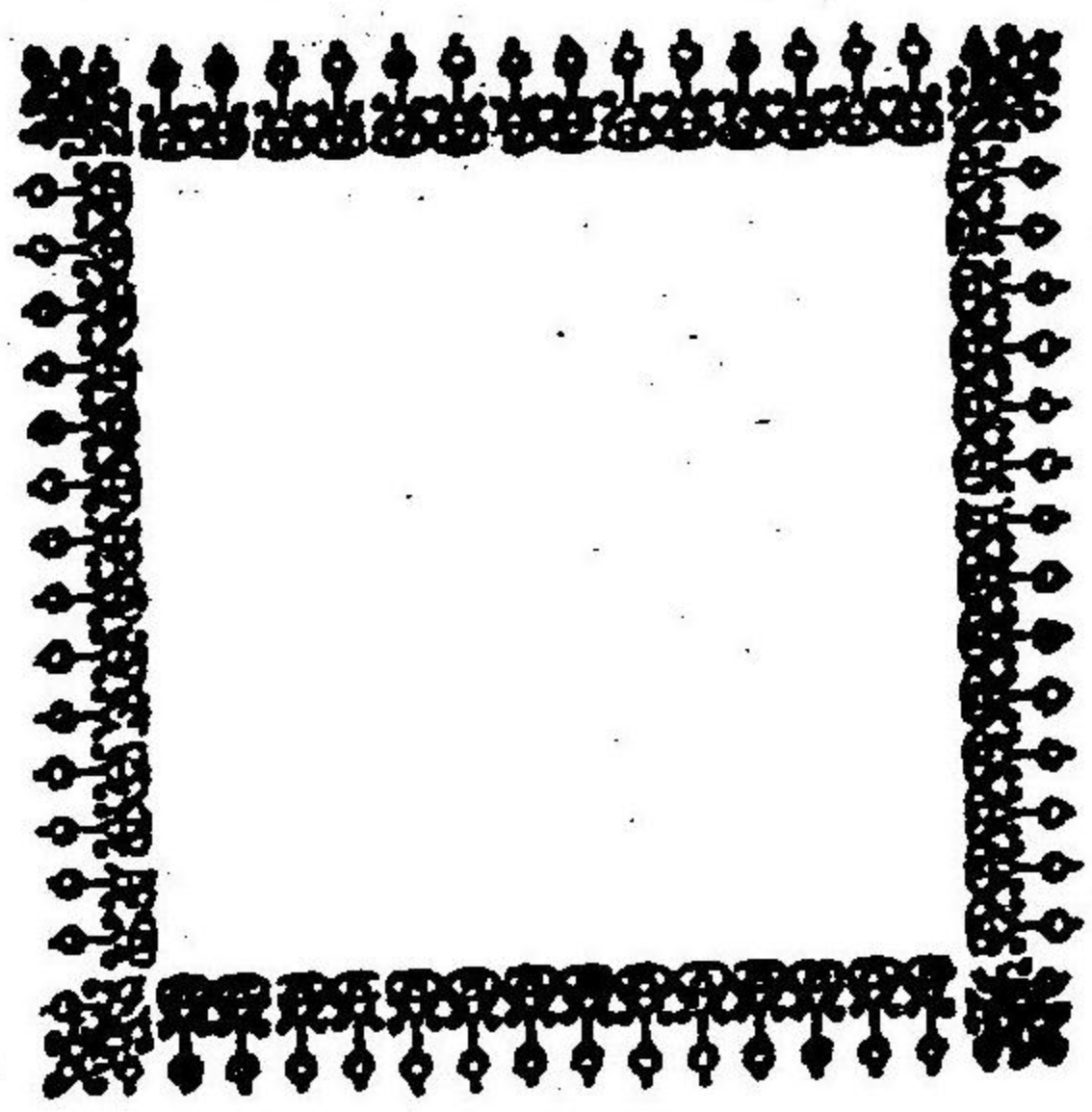
印刷者兼 鴉島實

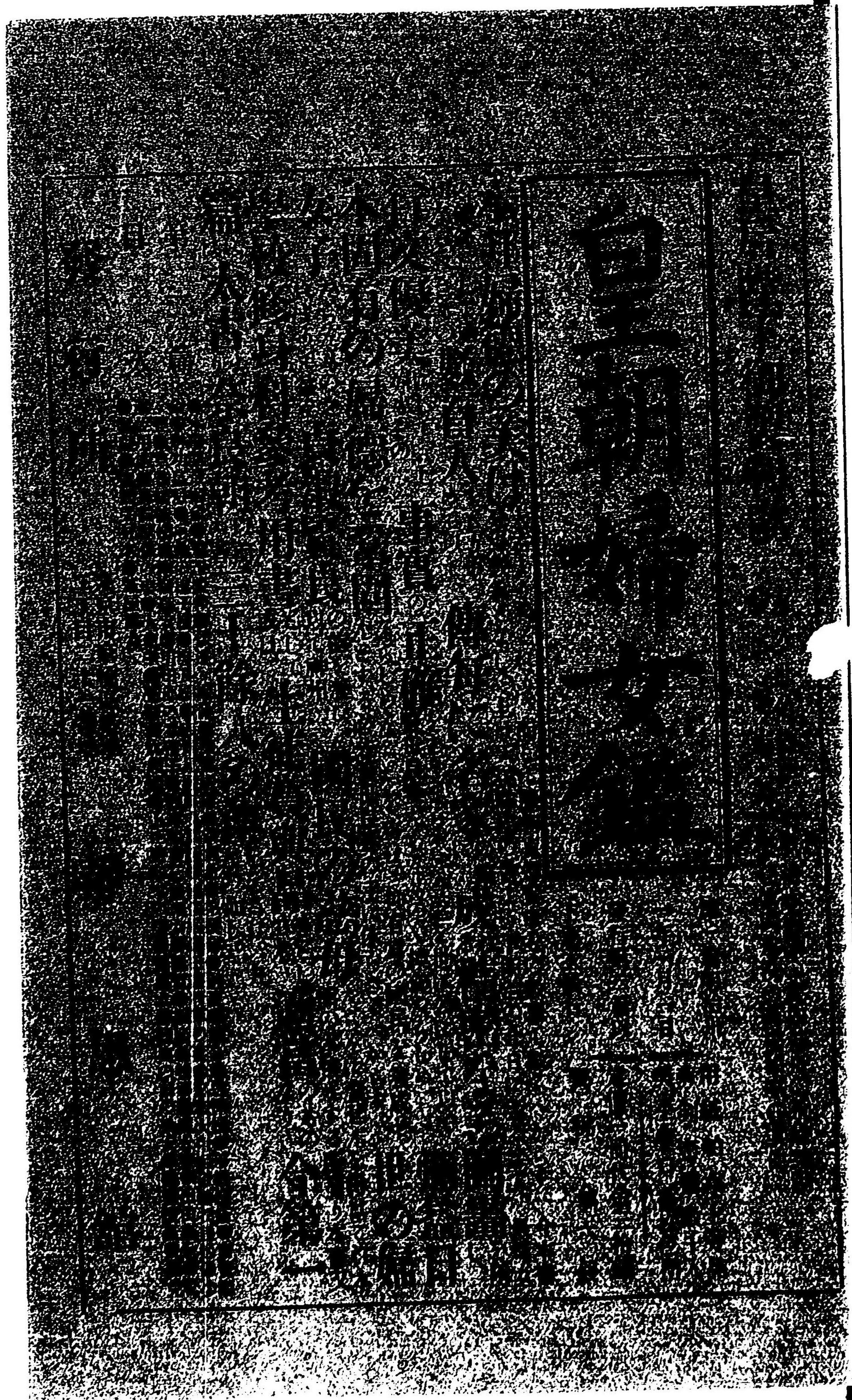
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

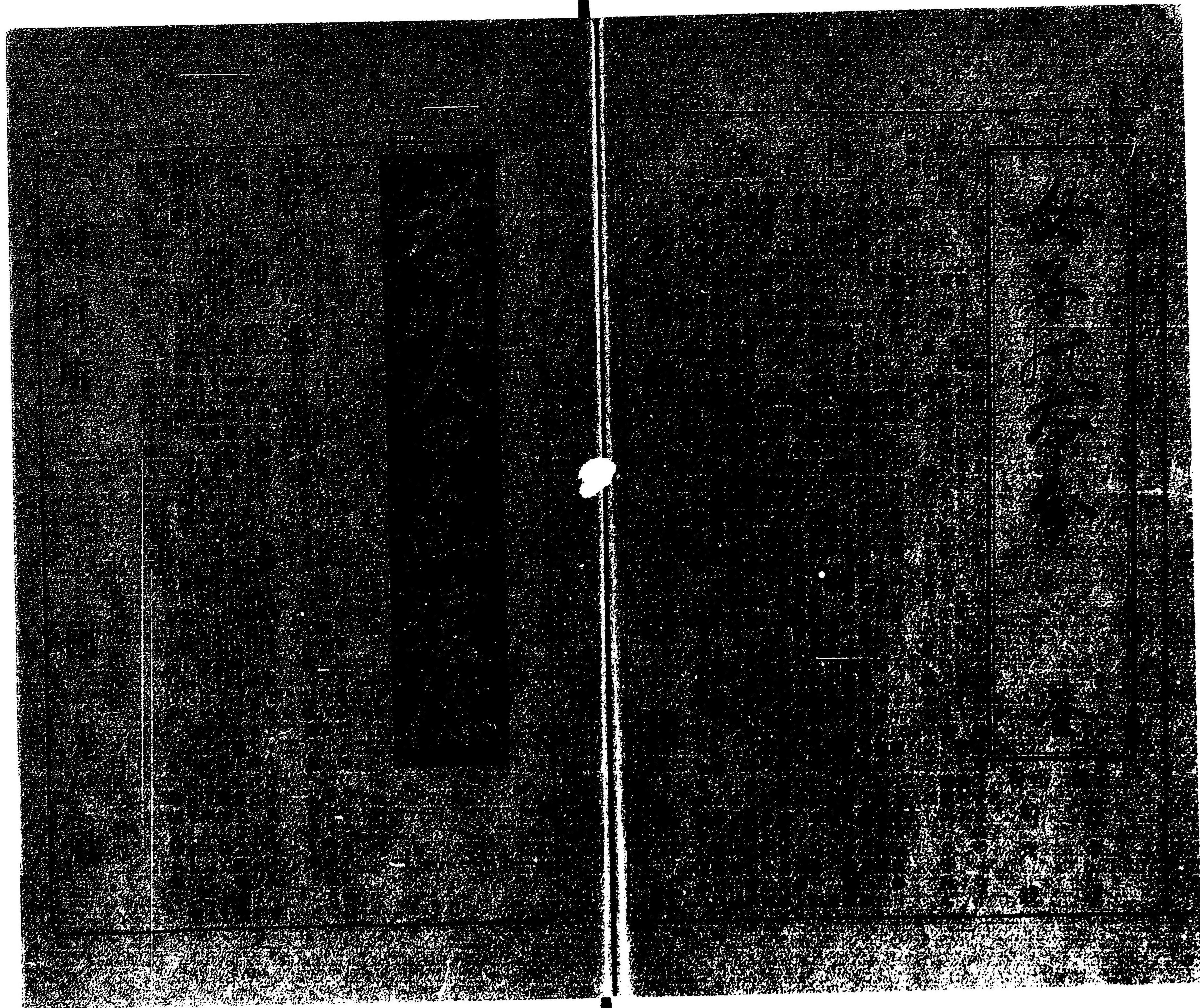
發兌 國光社

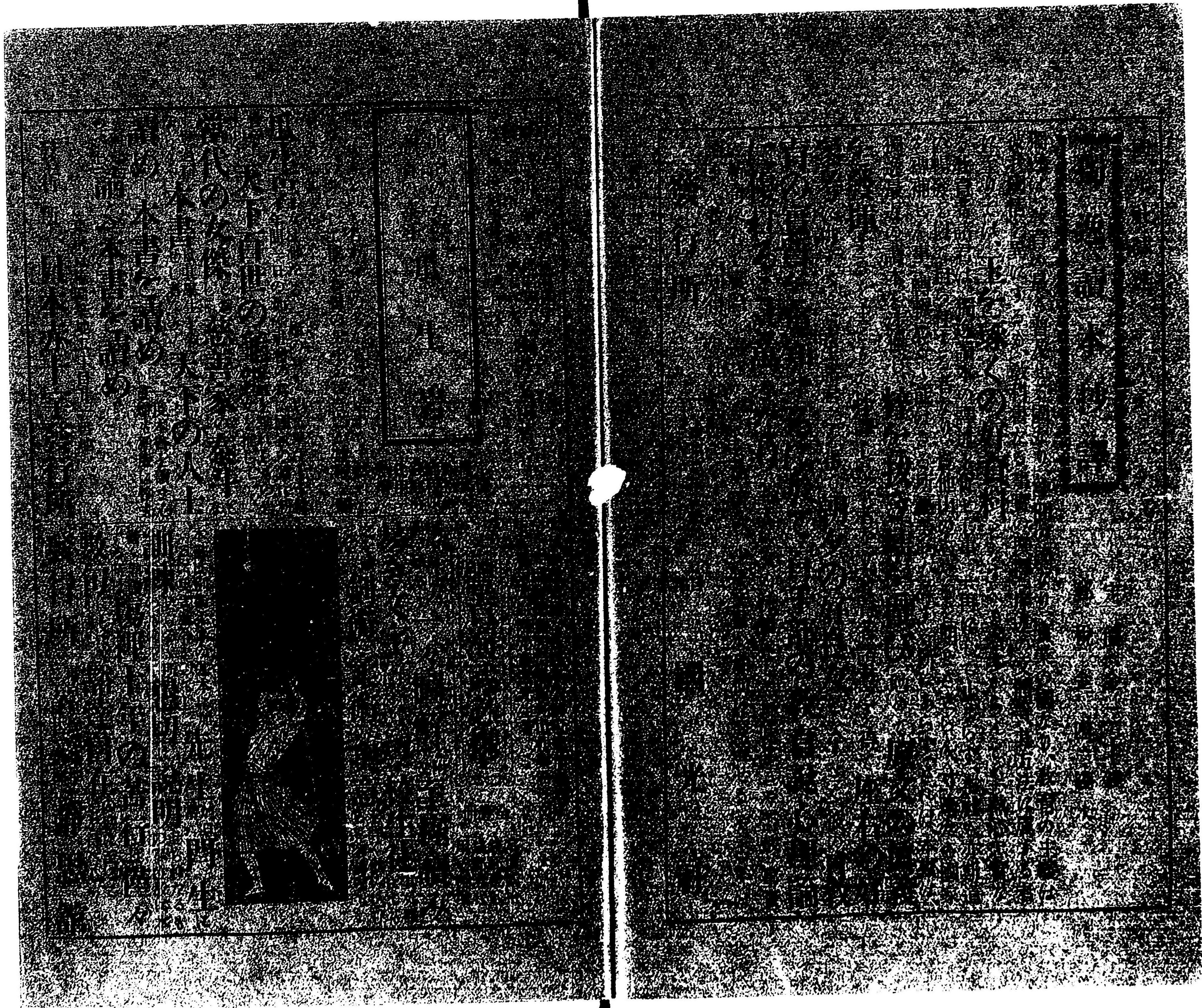
靜思館

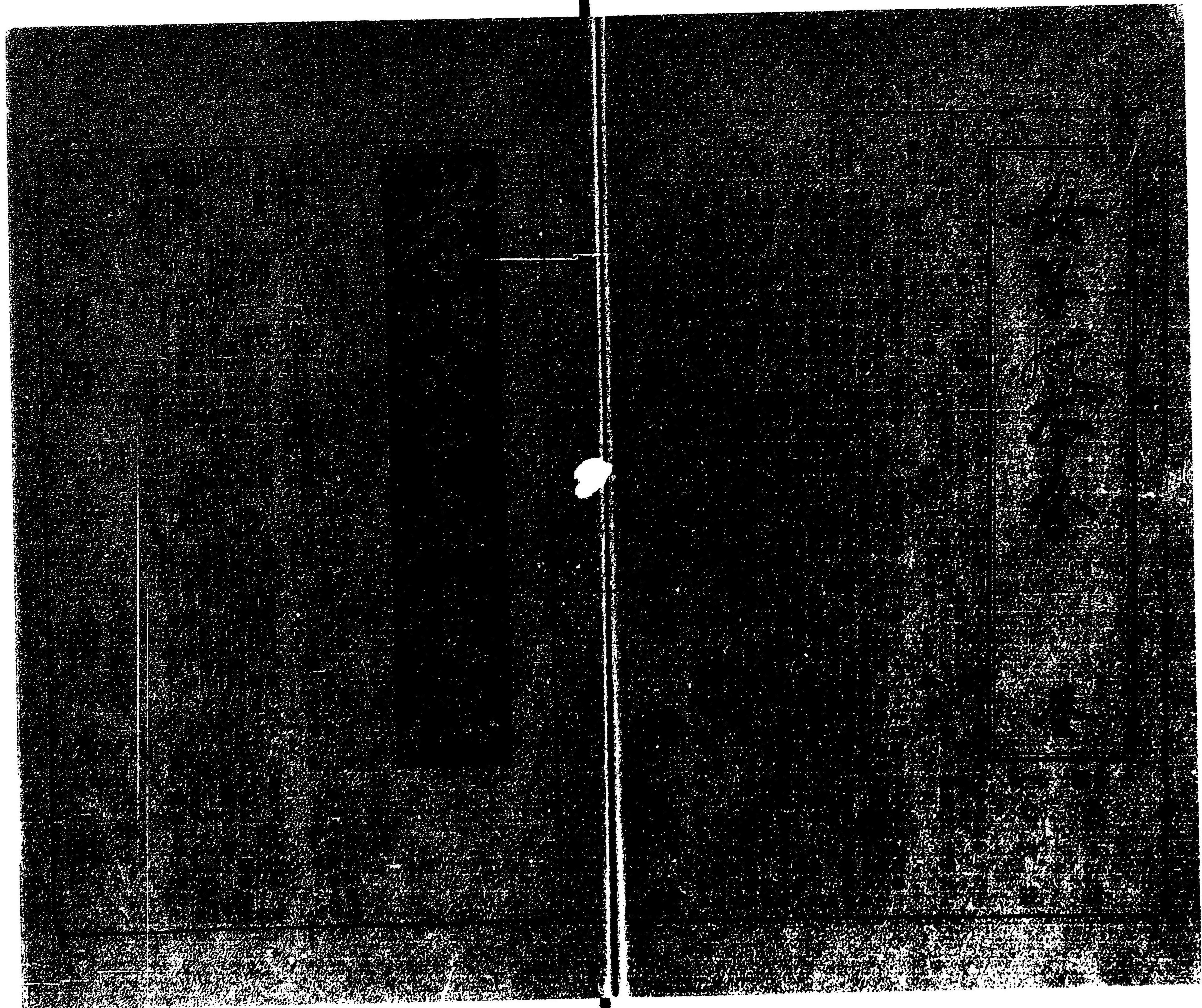
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

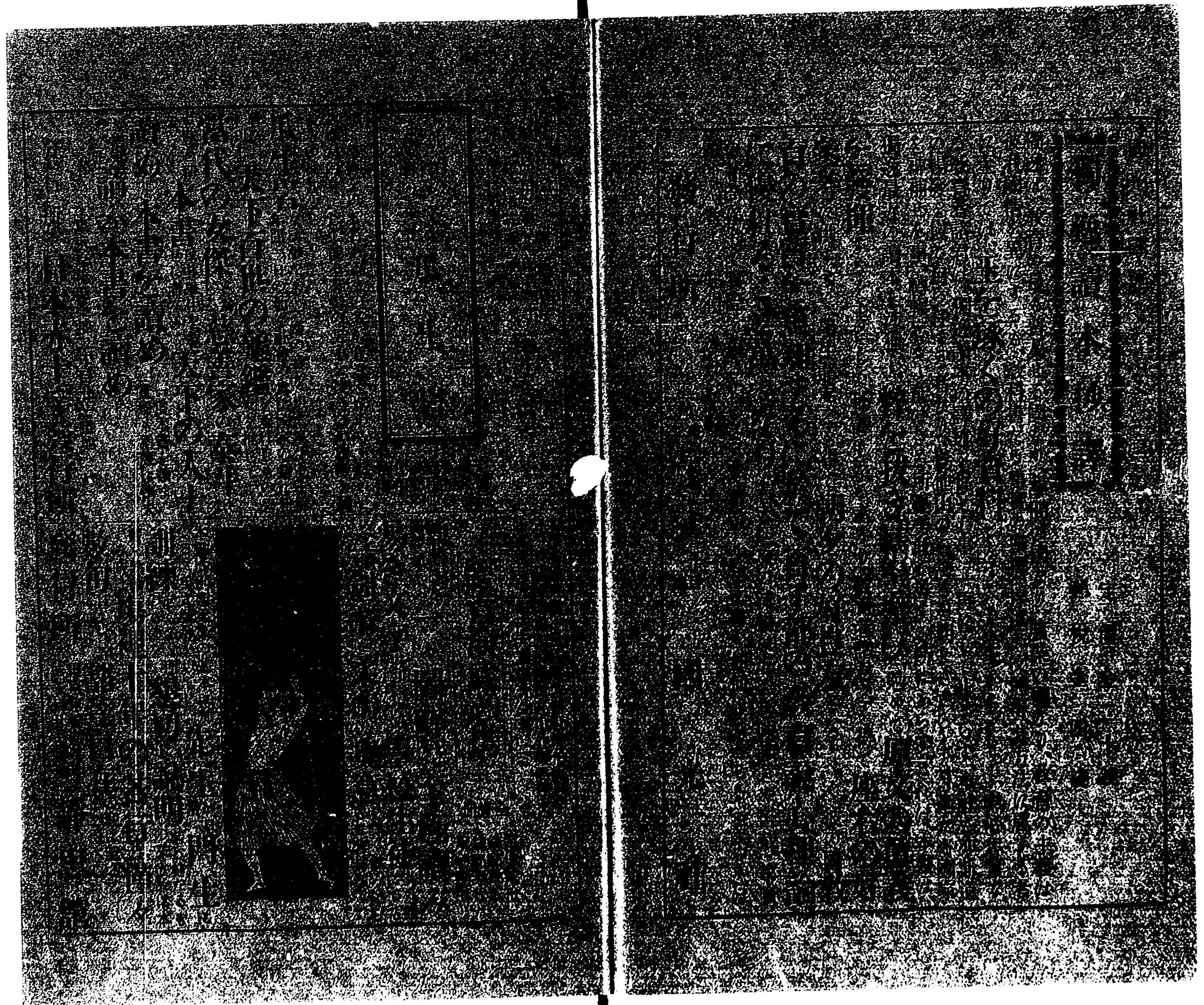


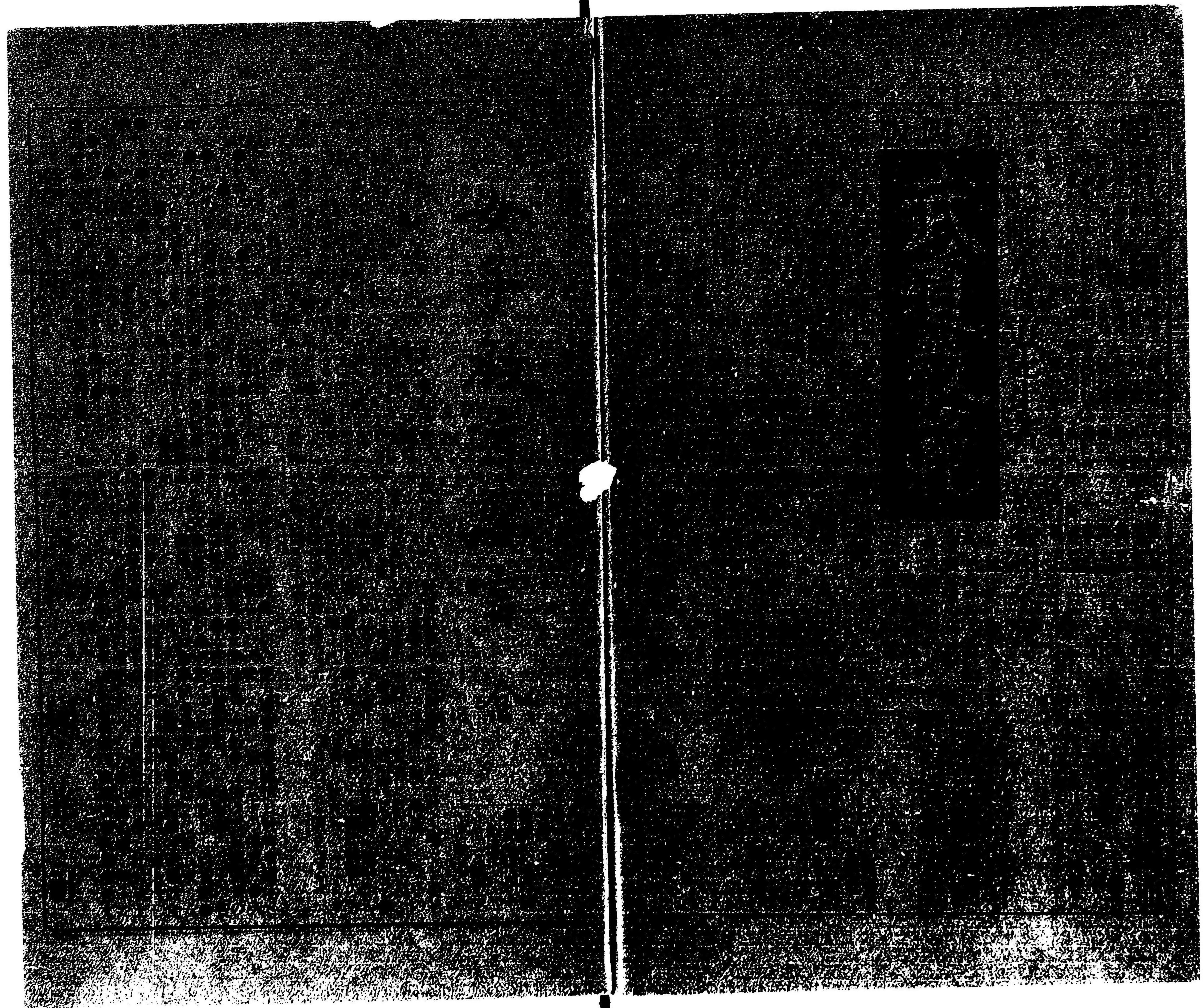


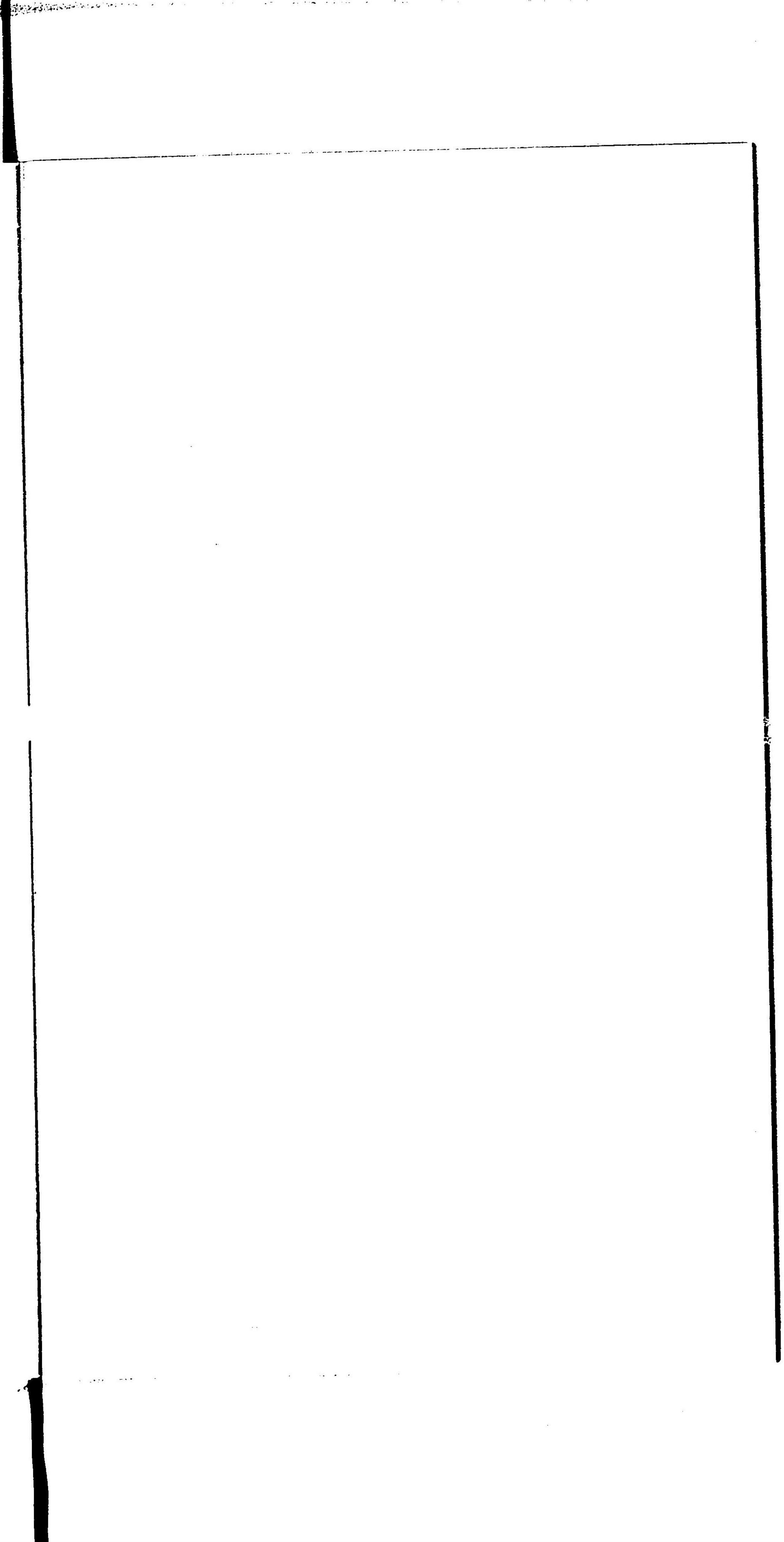


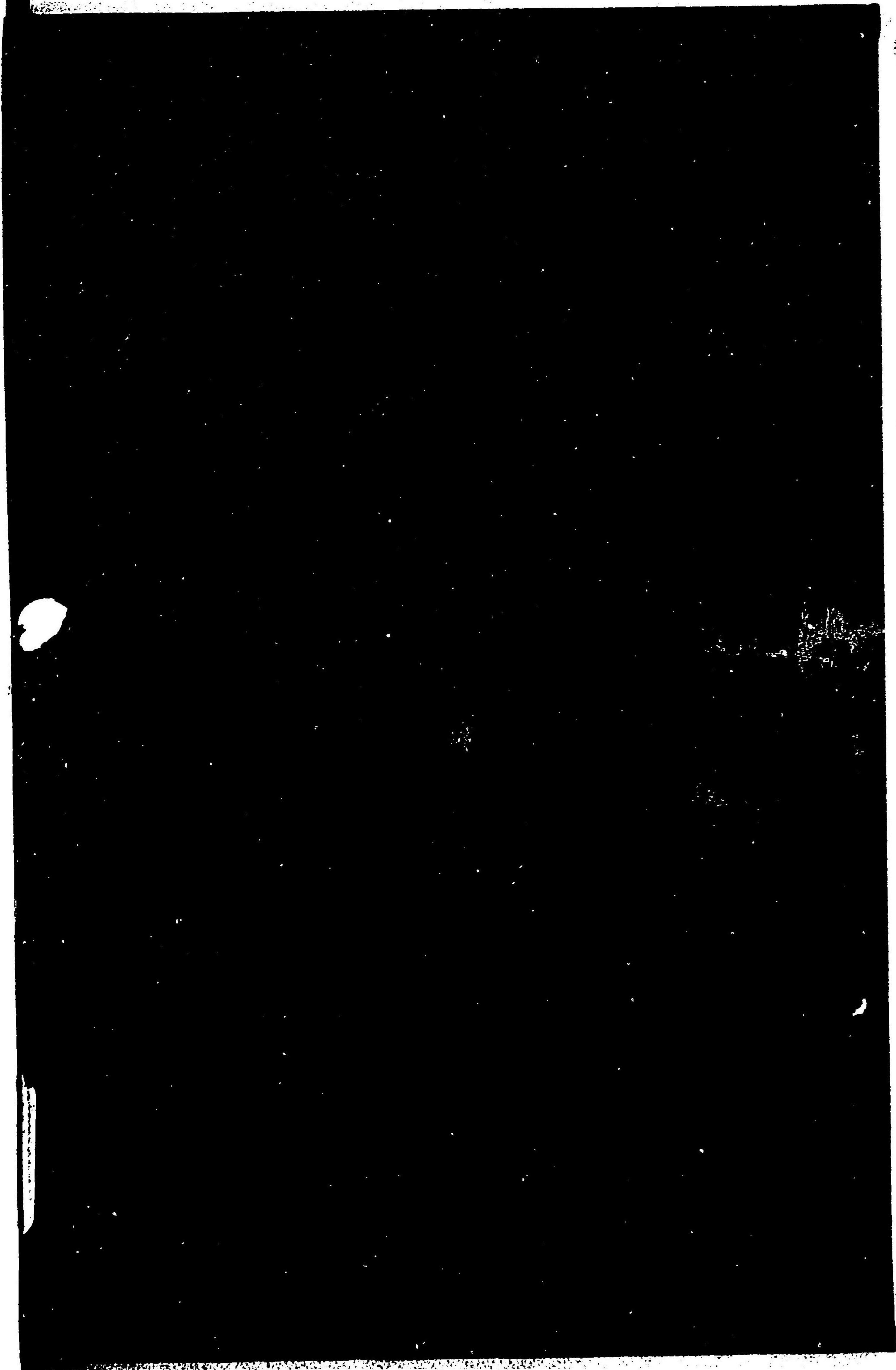












253

57

Ⓜ

050591-000-0

253-57

精神教育

副島 種臣/述

M31

BEA-0868

